

編 集 後 記

今年も多くの教職員の御尽力により、看護学紀要の発刊にこぎ着けました。投稿頂いた先生方、そして卒業生の方々にも御礼申し上げます。有難うございました。同様に査読を戴いた教員の方々ならびに、紀要委員、事務局の皆様にも御礼申し上げます。

紀要発刊の作業を行ってみての所感ですが、来年度からは紀要原稿の締め切りの時期、査読回数、手直しの期間などを1度再考していく時期に来ているかと考えられました。もう少し余裕が必要かと思えます。また「看護学部研究会」も同様です。いずれに致しましても、教員各位の研究成果を論文の形としてきちんと評価される形で発表することが重要であり拙速主義は避ける方向に踏み出す時期に来ていると思えます。一方では手元にある記録を備忘録として保存し、学内で討論を重ねる機会を提供する機能なども学術誌として要求されてもよいと思えます。専門性が高い論文は、限定された場のみでは、責任ある十分な査読には応えられないケースも出ないと言い切れません。透明性の高いディスカッションコーナーを作っては如何でしょうか。ディスカッションコーナーには、学外人にボランティアとしての参加を求めても良いと思えます。このやりとりは透明に残す必要があります。同時に外部に向けて大学の研究成果の議論する過程を周知、徹底する機会を設けることは学術誌としての価値を高めることに繋がると思えます。積極的に学外に討論の機会を呼びかけることも必要でしょう。そのようにできれば、学内だけの研究成果を満たすツールに終わらず、紀要の価値を高めることになるでしょう。その形を継続していくことで、いずれの日にか、宮城大学の紀要に掲載された研究者の結果・成果は、より多くの国内外の研究者の方々から引用などに活かされていく日がくることでしょう。

最後にますます多くの方が投稿し易い場として、そして査読をまかされた方も誇りと、責任感に支えられて、投稿論文は指摘を受け、訂正を実施することにより、より優れた形に変化しリリースされるという基本を大切にした発刊物「紀要」であり続けることを願っております。
(宮林 記)

宮城大学看護学部研究紀要委員会

委員長：宮 林 幸 江

委 員：川 村 武

伊 藤 ひろ子

山 本 真千子

John Wiltshier

桂 晶 子

掲載論文の多くは、宮城大学研究補助金による研究である。